

やってみよう!

# ポジティブ行動支援

第 1 回

## ポジティブ行動支援 とは？



香里ヌヴェール学院小学校教諭・研究員

### 松山 康成

まつやま やすなり 学校・学級における平和構築のための教育的支援や、子ども同士や子どもと教師の相互作用の心理的メカニズムの研究を通して、more happy, more friendly な school life の実現を目指しています。

今回より一二回にわたって「やってみよう！ ポジティブ行動支援」というテーマで連載を担当させていただく松山康成です。一年間、どうぞよろしくお願いたします。

この連載では、ポジティブ行動支援とは何か、その考え方や基盤的な理論とともに、実際に日本全国の学校現場のさまざまなフィールドで取り組まれている先生方とともに、実践を紹介していきます。ポジティブ行動支援を初めて知る方も、またこれまでに実践されてきた方にも有益なものとなるようまとめていきたいと思います。

### ポジティブ行動支援とは？

「ポジティブ行動支援」とは、当事者のポジティブな行動（本人のよりよい生活や、本人にとって価値を感じられる成果につながる行動）を、ポジティブに（罰的ではなく、肯定的、教育的、予防的な方法で）支援するための枠組みのことです（日本ポジティブ行動支援ネットワークホームページ）。

これまで、本誌や『PBIS実践マニュアル&実践集』（栗原、二〇一八）を代表とするさまざまな雑誌や書籍などではPBISやPBISといった言葉で実践が広がっているものと、ポジティブ行動支援は同様の取り組みです。

私が理事を務める日本ポジティブ行動支援ネットワークでは、この実践や研究を日本語でわかりやすくイメージしやすい言葉とするために「ポジティブ行動支援」という訳語を推

奨し、学校や福祉現場、家族支援などの多様な領域で推進しています。

ポジティブ行動支援は、アメリカから二〇か国を超える世界の国々に実践が広がっている普遍的な取り組みです。アメリカにおいては約二〇%以上の学校に導入されており、その特徴として次の六つが示されています (George et al. 2009)。

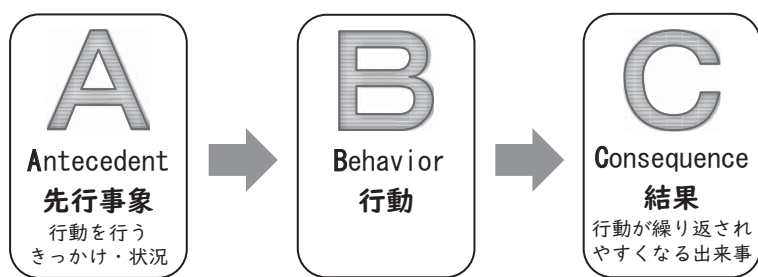
- ① 問題行動の予防
- ② 望ましい対人的行動やスキルの指導
- ③ 望ましい行動の承認
- ④ 子どものニーズに応じてよりニーズの高い子どもにはより手厚い行動支援を行う多層支援のアプローチ
- ⑤ データに基づく問題解決
- ⑥ エビデンスベースの実践を支えるシステムの構築

日本の学校現場では、子どもたちのいじめ行為や暴力行為等の問題行動の増加が問題となっており、教師による体罰や暴言などの不適切な指導が問題となっています。昨年末に文部科学省から示された生徒指導提要(改訂版)においても、教員による不適切な指導について言及され、その具体例と問題点について示されています。

しかし私たち教員は、子どもたちに対する適切な指導・支援の具体的な方法について学ぶ機会は少なかったのではないのでしょうか。ポジティブ行動支援は、そのような適切な

指導・支援の方法を提供する一つとなります。ポジティブ行動支援では、適切な指導・支援を実現するために、応用行動分析学における「行動のABCフレーム」の枠組みに基づいて考えます。これは、その行動がなぜ生じたり持続しているかを三つのフレームで考えるというものです(図1)。

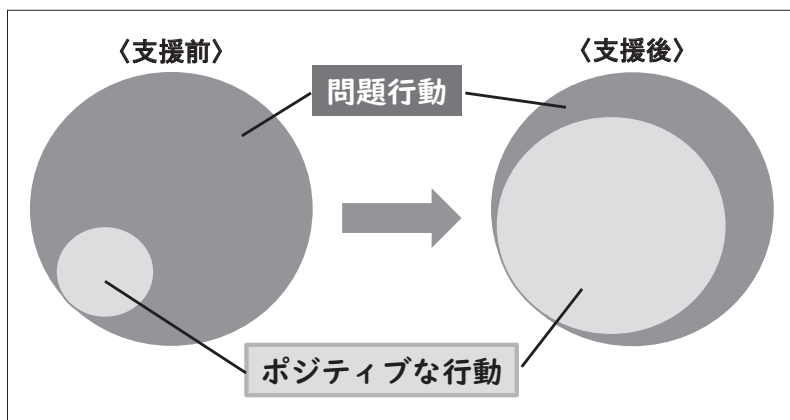
図1 行動のABCフレーム



- A : 子どもたちの行動の前のきっかけ・状況(先行事象)(Antecedent)
- B : 子どもたちの行動(Behavior)
- C : その行動の後に起こる結果(Consequence)

行動とその前後の状況や環境の変化のこのような関係を「行動随伴性」とも言います。庭山(二〇一八)は、応用行動分析学に基づいてポジティブ行動支援の実践に取り組むことで「目の前の子どもに合わせて柔軟に支援を調整することができると指摘しています。

図2 支援前後の問題行動とポジティブな行動の変化



ポジティブ行動支援を実践する上での心がまえ

問題行動を減らすのではなくポジティブな行動を増やす

ポジティブ行動支援を学校において教師が実践していく上で、大切な考え方があります。その一つが、「問題行動を減らす」のではなく、

「問題行動を増やす」というものです。

教師は子どもの問題行動に着目してしまい、その問題行動をどうやってやめさせるか、どうやって起きないようにするかというネガティブな思考に陥りやすくなりがちです。それが、体罰や執拗な注意叱責など不適切な指導の原因になってしまうこ

ともあります。

ポジティブ行動支援は、問題行動だけに着目して対応するのではなく、問題行動に代わるポジティブな行動がどのような環境調整によって生まれやすくなるのか、持続しやすくなるのかと考えます。

もちろん日々の指導の中では問題行動に対する指導は行いますが、それだけに終始せずにポジティブな行動を増やす支援を考えていくことが求められます。ポジティブな行動と問題行動は同時には行わないため、ポジティブな行動を増やしていくことによって、相対的に問題行動が減少していくこととなります（図2）。

行動の原因を環境に求める

次に、「行動の原因を個人」ではなく「環境」に求める」という考えがあります。よく「どうしてこの子はこんなことばかりしてしまうんだろう」「この学級の子どもたちった

表1 原因帰属理論

	変化が難しいこと	変化可能なこと
対象者の内側	生まれつきの能力 発達の課題、器用さ 身体的・精神的な障害 頭が悪いから	経験不足 努力、体調 やる気 勉強しなかったから
対象者の外側	生まれた環境 親の育て方 法律や制度 難しい問題だから	課題の量・内容 部屋の気温・静かさ 座席の位置・高さ 運が悪かったから

ら…」などと、子ども自身や集団にその問題の原因を求めてしまうような会話を職員室で聞いたことはないでしょうか。このような因果関係を考える上で、ワイナーの原因帰属理論というものがあります(表1)。対象者(子ども)の内側に原因を求めてしまうと、「なぜ勉強ができないの?」↓「自分は頭が悪いから」↓「なぜ頭が悪いの?」↓「勉強ができないから」というように、循環論に陥ってしまいます。このように解決策を見出せない状況になりながらも個人を責めてしまう状況を《個人攻撃の罠》と呼びます。

このような循環論や個人攻撃の罠に陥らないために、「対象者に責任転嫁せずに、対象者の外側かつ変化可能なことに工夫の余地を探して支援していく」と宣言しましょう。

“ちゃんと” “ぶつ” という考えから脱却する

三つ目は「できて当たり前」「できて当然」という考えから脱却することです。よく「ちゃんとやりなさい」「ぶつうはこうするんだよ」なんて言葉を耳にすることがありますが、誰にとつての“ちゃんと” “ぶつ” なのでしょう。また、その価値観や求めている行動について、本当に子どもと共有できているでしょうか。

ポジティブ行動支援では、その環境においてどのような行動が望ましいのか、どういった行動を期待するのか、何をもってポジティブな行動なのかをいねいに支援者と支援対象者とともに議論し、共有を図っていきます。

### ★ 3つのアプローチ

ポジティブ行動支援は、ポジティブな行動が生まれやすくなるように、持続するように支援をしていくわけですが、その際は先述のABCのフレームに基づいて、それぞれにおけるポジティブな行動が生じにくい問題に対して支援を考えていきます(図3)。

ここでは「あいさつをする」という行動に対する支援を例に考えていきましょう。  
まず先行事象(A)に対して「何をしたらいいかわからない」という問題が考えられます。そこで、あいさつ

図3 ポジティブ行動支援における3つのアプローチ

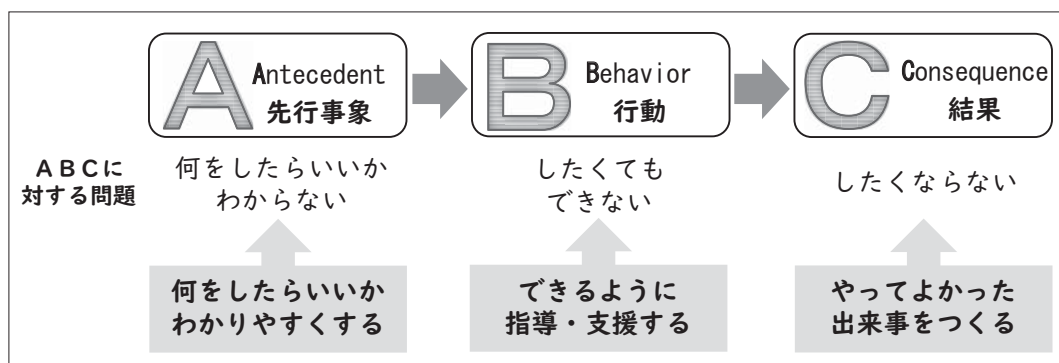


写真1 あいさつに取り組むためのポスター

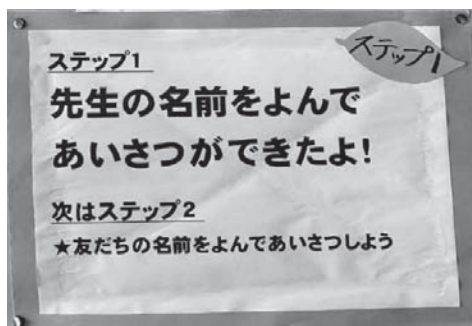


写真2 あいさつする場所を示すあいさつマット



写真3 あいさつの方法を共有するポスター



はいつ・どういった場面で行うのか、またどのようにあいさつをするのか、なぜあいさつが大切なのかについて、わかりやすく話します。例えば、あいさつの大切さを伝えてあいさつに取り組むためのポスターを掲示したり(写真1)、集会で呼びかけたり、またあいさつをする場所を示すこと(写真2)も、それにあたる支援と言えるでしょう。

次に行動(B)の問題として、ポスターや集会などであいさつの大切さや何をしたらいいかがわかって、「したくてもできない」というスキルの欠如が考えられます。それに対しては、学級であいさつの方法やタイミンクなどを教え、実際に練習するといった、スキルトレーニングを行うことが支援として考えられます。また、実際にできている場面を写真やビデオに撮って、視覚的に示して共有することも有効でしょう。

う(写真3)。

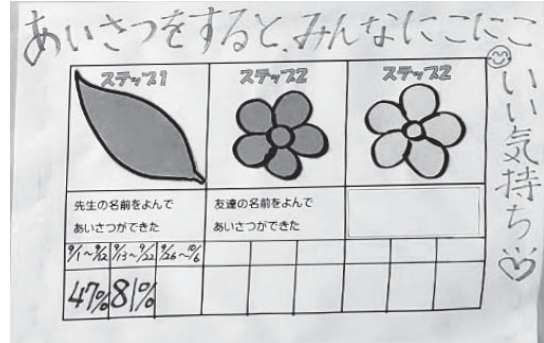
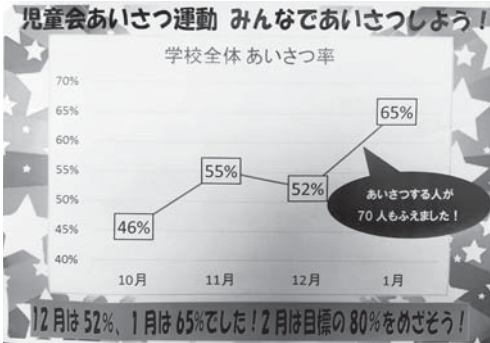
最後に結果(C)の問題として、「したくならない」という問題があります。特にあいさつの場合、あいさつをしたのに返してくれない相手に対して、あいさつをすることが減少していったという経験を、皆さんももっているのではないのでしょうか。あいさつにおいて「やってよかった」と実感するために大切なことは、あいさつをした(アクション)際に、相手の人があいさつを返す(リアクション)ということです。このように、アクションとリアクションの関係が成立することが、行動の増加と持続に大きな影響を及ぼします。そのため、支援としては、学校みんながあいさつすることを大切にする日を設定したりすることが有効でしょう。

また、ポジティブ行動支援では、記録・データに基づくリ

アルタイムでの評価を最重要視します。

あいさつであれば、校門に立ってあいさつをする校長先生にカウンターを持って記録してもらったり、あいさつができた子どもたちにカードを渡してその枚数を集計したりすることで記録が可能とな

写真4 あいさつができた割合を子どもたちに伝えるポスター



ります。

このように記録をとることで、具体的にどのくらい行動ができるようになっていくかをデータに基づいて評価し、ここまでの三つのアプローチがどのくらい有効であったかを明らかにすることが出来ます。それをグラフや表にして、子どもたちにもフィードバックすることもできます(写真4)。また、データに基づいて支援策の改善の要否についても検討することが出来ます。

ポジティブ行動支援では、このようなデータに基づく支援の評価と、それに基づいて支援をよりよくしていくことをとても大切にします。

### ★ ポジティブ行動支援は、集団でも個別でも

ポジティブ行動支援は、学校や学級などの集団の行動について支援ニーズがある場合は、学校全体・学級全体の子どもの行動を対象として支援を考えていきます。

また、個人や一部の小集団の行動について支援ニーズがある場合や、全体的な支援の結果、一部の子どもの行動について支援ニーズがある場合は、それに応じて個別的に行動の支援を考えていきます。

このように、集団であっても個別であっても、同じアプローチによってポジティブな行動を支援していきます。

今回は学級におけるポジティブ行動支援について、実際の支援の様子を踏まえながら紹介したいと思います。

#### 〈引用・参考文献〉

George, H.P., Kincaid, D., & Pollard-Sage, J. (2009). Primary tier interventions and supports. In W. Sailor, G. Dunlap, G. Sugai, R. Horner (Eds.) *Handbook of positive behavior support*. Springer, pp.375-394.

栗原慎二編著(二〇一八)『ポジティブな行動が増え、問題行動が激減！ P B I S実践マニュアル&実践集』ほんの森出版

日本ポジティブ行動支援ネットワーク ホームページ <https://pbsjapan.com/>

庭山和貴(二〇一八)「P B I Sのベースにある応用行動分析」栗原慎二編著『ポジティブな行動が増え、問題行動が激減！ P B I S実践マニュアル&実践集』ほんの森出版

Weiner, B. (1979) A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational Psychology*, 71(1), pp.3-25.